

# 雪渡り

河合 由起子

「およそ人間というものは、差別をする生き物です」

どんな話の流れだったか、先生は確かにそう言った。話の続きはすこんと消えてしまっていて、さっぱり思い出せないのだけれど。あれは国史の時間だったろうか。

いずれにしても、そのとき僕の頭に浮かんだのは身分だとか生まれだとか、勉強ができるとかできないだとか、そういうことではなかった。もっと言ってしまえば、「差別」というほどのことでもなかった。僕は、狐のことを考えていた。

僕が狐に遇ったのは春だった。学校からの帰り道、ふと見ると大きな桜の木の下に狐がうずくまっていた。脚に怪我をしているようだったので、僕は家から軟膏をとってきて狐に塗ってやったのだった。狐は僕にお礼を言った。本当は人と話をしてはいけなかったのか、言ったあとともあわてていた。僕はしかしどうとも驚かなかった。狐は自分がしゃべっても僕が驚かないのに驚いていた。

「もしよろしかったら」

おずおずと、しかし黒曜石のように黒い瞳をきらきらさせながら狐は言った。

「今度の朧月夜の会にあなたもいらっしやいませんか。十歳以下のお子さんなら、参加してもいいことになってい

るんです。おいしいお団子もありますよ」

「僕はついおとつい十二になったんです」

と僕は正直に言った。

「十二歳だといけないのでしょうか」

「いけないのです」

狐にも表情というものがあるのだなあと感じながら、けれど十一歳と十二歳と、それほど違いがあるものだろうか。僕はいぶかしんだ。僕の考えていることがわかったのだろうか、狐は説明するようにつけくわえた。

「なんでも、十一歳のうちはこども・こども・こどもなの